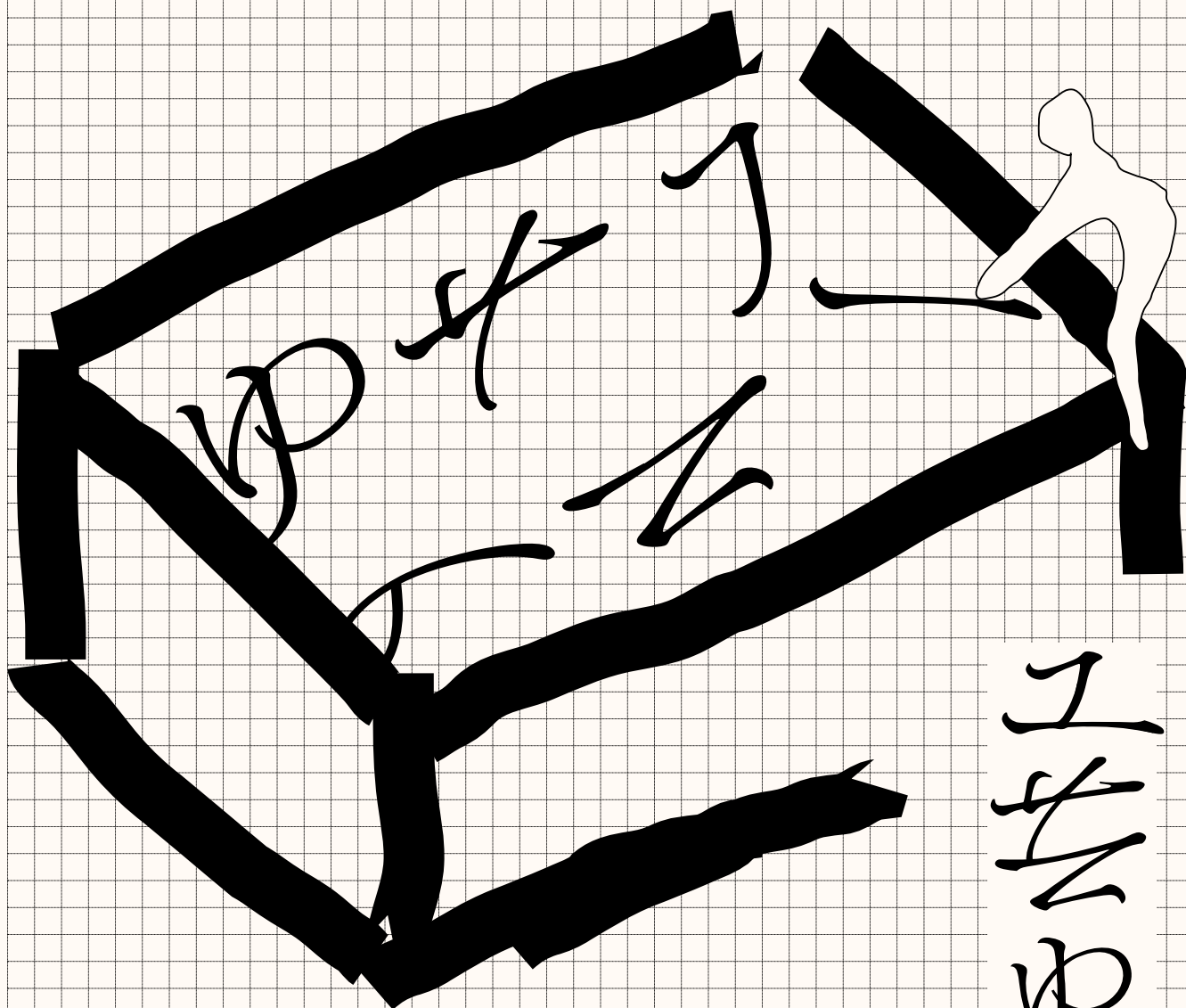
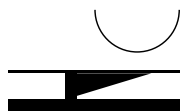


工芸史 研究会



令和六年度（二〇二四年度）
活動報告



工芸史研究会（以下「本研究会」）は、設立4年目となる令和6年度、以下の活動を行った。

目次	1、活動報告
	2、今年度の要改善点および来年度の目標
	3、年間活動記録
	4、収支報告

1、活動報告

今年度は研究会2回、部会1回を開催した。研究会、部会に関しては、会員自身が続けてきた研究・調査の経過報告、調査研究を行い、質疑応答では各分野から活発な意見交換が行われた。研究発表は、さまざまな地域に住む会員の参加を促すため、引き続きオンラインでの開催を基本とした。

一昨年度導入したアンケートフォームに関しては、目標としていたほぼ毎月の募集告知を行ない、会員の研究発表の促進、会員からの新事業の希望を聴取することができ、申請方法の認知が浸透したといえる。

引き続きフライヤー、ウェブサイト等を用いた会員の勧誘を行なった。また昨年度、新事業として『工芸史』を発刊した反響があり、会員が増加した。2025年5月現在、会員数は55名である。

機関誌『工芸史』第2号の刊行に向けた編集作業を行なった。講演会の記録、会員の活動の記録を主とし、柔軟な研究発表の場の整備を進めている。

詳細は以下に述べる。

（ア）研究会

〔第1回〕

■ 題目：「再考：“シルクロード”における絹の位置づけ」

■ 発表者：野元京子（オックスフォード大学）

■ 日時：2024年4月3日（水）19：30～

■ 会場：オンライン開催（Zoomにて開催）

■ 概要：19世紀末にドイツの地理学者リヒトホーフェンが、中央アジアを横断する古代の東西交通路を“Seidenstrassen（絹の道／シルクロード）”と名付けて以来、絹は長距離交易の象徴的アイコンとなった。その後、現在にいたるまでの100年超の様々な研究成果を通じ、「シルクロード」概念は、内容的にも地理的にも大幅に拡大した。発表者の研究目的は、この拡大した「シルクロード」概念において、絹交易の意義を再考することである。本発表では、その第一段階として、絹交易の時代区分を試み、3～8世紀が、技術革新・流通経路の多様化等の観点から、それ以前と以後を分ける重要な期間だったのではないかという議論を行なった。

〔第2回〕

■ 題目：「明治期の輸出陶磁器にみられる立体装飾について—眞葛焼・隅田焼の高浮彫装飾の比較を中心に—」

■ 発表者：小川咲良（神奈川県立歴史博物館）

■ 日時：2025年3月23日（日）15：30～

■ 会場：オンライン開催（Zoomにて開催）

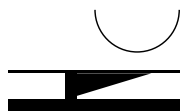
■ 概要：明治期の輸出陶磁器制作において、従来の陶磁器産地を離れ、輸出港に近い場所で作陶を行った窯では、横浜では宮川香山の「眞葛焼」、東京では井上良斎らの「隅田焼」などが挙げられる。この二つの陶磁器はいずれも「高浮彫」と呼ばれる立体装飾が大きな特徴であるが、作品全体の印象は大きく異なっており、その違いについて造形と制作背景の面からの説明を試みる。

ここから、近年研究の進んだ眞葛焼だけでなく、東京もふくめた作陶の相違点・共通点と制作背景について、立体装飾という特徴から整理を行いたい。このことにより、横浜・東京では素地を産地から運んできて絵付けのみを行う業態が主流であった中での、輸出地における作陶の全体像を知る手がかりとしたい。

本発表は科学研究費助成事業研究活動スタート支援「近代陶磁史における横浜・東京の作陶—初代から三代の井上良斎を中心に—」（課題番号：24K22458）の研究成果に基づく。

（イ）部会

会員主体でより気軽に研究経過の発表、意見交換を行なうことを目的とし、会員の発案により部会の区分を設けた。



〔第1回〕

- 題目：「秀衡椀に関する検討」
- 発表者：泉山真悠（東京藝術大学大学美術館）
- 日時：2024年7月12日（金）20：00～
- 会場：オンライン開催（Zoomにて開催）
- 概要：秀衡椀に関する基本的な情報と美術史的・工芸史的な分野における到達点を共有したのち、これからの秀衡椀研究における可能性を主な議題として意見交換を行なった。考古学や分析化学、美術史や工芸史の両分野における漆椀研究の情報共有を行い、それぞれの手法の特性を再認識する場となった。

（ウ）機関誌について

昨年度に引き続き、機関誌『工芸史』第2号の刊行に向け、編集作業を行なった。
来年度以降の継続的な刊行のため、編集スケジュールについて再考した。3月末刊行から、毎年春～初夏刊行に刊行時期を移動し、編集作業に余裕を持たせた通年のスケジュールに整えていく方針となった。

【機関誌概要】

第2号は、論考（研究ノート）、展覧会報告、研究史、作家会員の作品を掲載した。今号も創刊号に引き続き査読制度をとらず、工芸史に関わる多分野の若手の研究や動向をタイムリーに発表、記録できる場を意図した。会員のほか、一般書店、美術館博物館、図書館、大学等へ配本する予定である。

- ・編集：工芸史研究会（編集委員会：廣谷、泉山、橋詰、金昭延）
- ・発行：南方書局（富澤大輔）
- ・デザイン：明津設計（浅田農）
- ・題字：柯輝煌
- ・印刷：加藤文明社（PD：平井彰）
- ・発行部数：500部
- ・判型：B5変形
- ・発行日：令和6年5月31日
- ・発刊目的：（1）当会の活動記録をアーカイブし、会員の発表の場をつくる
（2）工芸研究の総合誌として、分野を跨ぎ知見・研究動向を共有する

- 内容
 - 会員作品 金保洋（漆造形）
 - 会員の論考
 - 岡登志雄 「〈研究ノート〉唐草文様史（一）—唐草文様の伝播と現地化をめぐる議論と課題—」
 - 沼沢ゆかり 「〈展示報告〉特集「遊牧のくらしとテキスタイル —バローチを中心に—」の開催まで」
 - 橋詰果歩 「〈研究ノート〉クラフト運動について —陶芸との関連を中心に—」
 - 付録：「工芸」関連展覧会年表（北陸編、2008-2023）
- 研究会憲章
- 活動記録

2、今年度の要改善点および来年度の目標

○ 機関誌の刊行

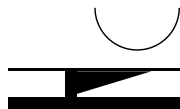
- ・創刊号の編集に際し、結果的に特定の編集委員に会務が集中したため、持続可能な編集会務の形を引き続き検討する。原稿依頼、原稿締め切り、原稿確認、校正・校閲、組版、発刊まで一年を通した余裕あるスケジュールとする。

○ 運営委員会における会務の効率化

- ・ボランティアによる運営である以上、運営委員会の会務に過度な負担感が生まれないようにすることは喫緊の課題である。会務の適切な振り分けを行い、運営に関わる会務を属人化しないツールの導入を促進する。

○ 工芸関連の学術情報共有の活発化

- ・LINE オープンチャットを主として、展覧会、シンポジウム等、工芸に関する情報を積極的に共有し、引き続き会員同士も発信しやすい雰囲気作りを行なう。



3、年間活動記録

ほぼ毎月1回、運営委員会を行なった。

2024年	4月 3日	【第1回研究会】
	4月 21日	創刊号『工芸史』書店に配本開始
	4月 28日	運営委員会 MT（年度報告について、機関誌2号内容検討、研究会の今後の方針）
	5月 27日	運営委員会 MT（決算報告、会則改訂、機関誌2号、講演会）
	6月 26日	運営委員会 MT（会則改訂、機関誌2号の執筆要項、第1回部会の事前打ち合わせ）
	7月 12日	【第1回部会】
	7月 29日	運営委員会 MT（会則改訂、運営方針、会計・会費について）
	9月 29日	運営委員会 MT（機関誌2号について）
	10月 27日	運営委員会 MT（会務分担、発表募集フォームの検討、機関誌スケジュール）
	11月 30日	運営委員会 MT（会務分担、機関誌スケジュール）
2025年	1月 26日	運営委員会 MT（機関誌2号計画検討、第2回研究会、申請フォームの周知、講演会の検討、研究会の多面化検討）
	3月 2日	運営委員会 MT（機関誌2号編集、第2回研究会事前打ち合わせ）
	3月 23日	【第2回研究会】

4、収支報告

収入の部			
	前年度繰越分		70,230
	会費（計54名*） *前年度比7名増 *未納額を含む		42,500
	寄付 *会員の有志によるもの。		10,000
	機関紙売上 （会員限定公開 Base のみ）		54,013
	利息		53
収入計			176,796
支出の部			
	委託費	・機関誌書籍設計 ・活動報告書 ・各種広報画像 ・WEB サイト運営	100,330
	通信運搬費	2024年度 Zoom 年会費	23,375
支出計			123,705
差引収支			53091